あ い さ つ

横浜市小学校教育研究会
会長　　後 藤　　俊 哉

今年度もコロナで始まり、コロナで終わる一年となりましたが、「学びを止めない」をスローガンに進めてまいりました。各教科等研究部会や各区研究会でのさまざまな運営上の工夫やご努力の結果、コロナ禍の中でこそ私たち自身の学びも子どもの学びを止めてはならないことを実感した一年でした。特に、市一斉授業研究会では、各部会が工夫して実施することができ、オンラインで 2,567 人が参加しました。各区研究会でも、区の実態に合わせ、毎月の研究会及び授業研究会をオンラインまたは、オンラインに加え一部集合研修とした、いわゆるハイブリッド型で取り組み、成果を得ることができました。

この背景には、令和２年９月に発足した、「横浜 GIGA スクールプロジェクト」により、教科横断的な取組ができたことや、情報教育研究会のご尽力により Googlemeet の活用や共有ドライブの整備及び活用が進められたことが大きな成果となりました。プロジェクト各位に感謝申し上げます。

令和３年１月に中央教育審議会（中教審）答申が取りまとめられ、「子どもを主語にした学校」が求められています。答申では目指すべき「令和の日本型学校教育」の姿を、全ての子どもたちの可能性を引き出す、「個別最適な学び」と、「協働的な学び」の実現としています。また、答申では、「自ら考え抜く学び」「自ら学習を調整」「自ら見通しを立てる」「自ら学習テーマを設定し探究する活動」など、「自ら」という言葉が大変多く登場しています。「学習の個性化」については、探究的な学びに代表されるように、自分で課題を設定し、自分で解決していく学びを目指しています。まさに「『自ら』学ぶ」活動です。

先日、慶応大学　教授　鹿毛雅治先生のご講演を聴く機会を得ました。「学習意欲」について、そもそも「意欲」とは、「意志」+「欲求」であり、「意志」とは「やり遂げよう」とする心理で、「欲求」とは「～したい」と感じる心理である。したがって「学習意欲」とは、「学びたい」と感じ、その学習を「やり遂げよう」とする心理であるとのことです。

したがって、「学習意欲」が高い時に見られる子どもの表情は、「学びの笑顔」であり「学びの真顔」である。その姿が見られた少なくとも「その瞬間」「その子」にとって、よい授業であることの証（あかし）であるとされました。

私たち教師にも「『自ら』学ぶ」ことが求められ、その時の教師自身に「学びの笑顔」であり「学びの真顔」が見られたら、研究が充実している証となるでしょう。今後とも私たちの学び合いの場である小教研への積極的な活動をお願いいたします。

この先の状況は未だわかりませんが、横浜市の大きな財産である研究会活動をさらに持続的・発展的に進めていくために、これからも実践と研究を両輪にして、前向きに取り組んでいきたいと思います。

最後になりましたが、これまで小教研を支えてくださいました各教科等研究部会及び各区研究会の会長及び実務担当者、全ての会員の皆様に深く感謝申し上げ、挨拶といたします。